2020 6 JUN No.381

ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

地域会だより・Bulletin Board ——1

連載：レーモンドホール物語 ④ ——2
菅原 洋一

矢田義典 前支部長・水野豊秋 新支部長に聞く
会員の自主性を尊重し、
やりたいことができる会に ——4
中澤 賢一

2020 年度
JIA 東海支部・地域会役員構成——6

保存情報 第 223 回
データ発掘：名古屋市昭和区・「南山の邸宅」 ——8
原 眞佐実

編集後記 ——8
中澤 賢一・川本 直義

2019 年度「JIA の建築賞」—— 表 3
浅井 裕雄・塩田 哲也

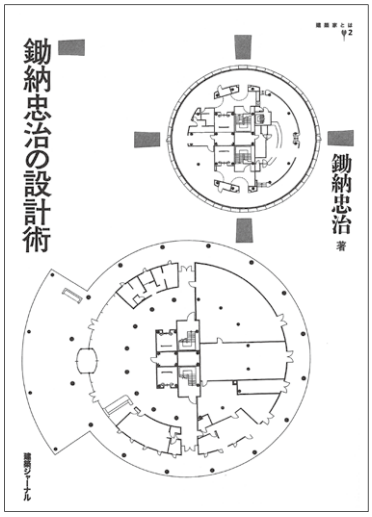
表紙：服部高志(HATTORI DESIGN)

Bulletin Board

書籍の紹介

鋤納忠治の設計術

著：鋤納忠治
発行：建築ジャーナル
定価：本体 2,400 円+税
発行日：2020 年 2 月 15 日
体裁／頁：A5 判並製／ 104 頁
ISBN：978-4-86035-113-7



JIA 東海支部事務局では、
ご希望の会員の方に
特別価格にてお分けしております。
数量に限りがありますので、お早めにお申し出ください。

お問合せ：月～金 09:30 ～ 17:30 (土日祝休)
〒460-0008 名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル 5 階
Tel:052-263-4636 Fax:052-251-8495
E-mail : shibu@jia-tokai.org

鋤納の設計術については、特に囲碁の仲間から共鳴・賛同の意見があった。コロナ休暇中は囲碁の勉強がお勧め。

（鋤納談）

鋤納 忠治 (JIA愛知)
伊藤建築設計事務所

■【対談】塚本 宏 × 鋤納忠治「イメージを実現する喜び」
■放物線の先 思いは空へ｜六郷孝也
■インタビュー
第一章 戦争と京都での学生時代 1931-1954
第二章 日建設計時代と伊藤建築設計事務所ができるまで 1954-1967
第三章 名古屋の 70 年代、80 年代
第四章 鋤納設計術五つの実践例
第五章 設計とは、建築家とは
■【鼎談】柳澤 忠 × 渡辺誠一 × 鋤納忠治「懐広さと倫理観がよい建築をつくる」
■コラム①～⑧
■解は必ずある 鋤納忠治の設計術｜西川直子
■年表

表紙シリーズ
イタリア生活に見るデザインと建築
3

「パヴィア修道院」の中庭

イタリア・ロンバルディア州、ミラノから電車で 30 分ほどの街、パヴィア。中世に北中部イタリアを支配したランゴバルド王国の首都として知られます。その豊かで歴史ある街に、世界五大修道院、ロンバルディア・ゴシック建築の代表作、パヴィア修道院があります。美しい壁画が描かれた教会内部から、修道士の方々が暮らす僧房に案内頂くと、大回廊に囲まれた中庭が広がります。時が止まったかのように穏やかで心安らぐ空間です。

服部 高志 (JIA愛知)
HATTORI DESIGN

Mie University Raymond Hall Story

レーモンドホール物語 ④

レーモンドホールの本来の所在地は津駅の西方の津市大谷町だった。現在はそこに三重県立美術館と三重県総合教育センターがある。昭和 26 年の竣工前後は教育制度の過渡期で、同じ敷地に旧制の三重県立医学専門学校（三重医専、昭和 19 年～昭和 26 年）、旧制の三重県立医科大学（三重医大、昭和 22 年～昭和 30 年）、新制の三重県立大学（昭和 25 年～、当初は水産学部のみで医学部設置は昭和 27 年）があった。三重医専が旧制医大に昇格し、更に新制の県立大学に転換していくため、このような複雑なことになったのである。

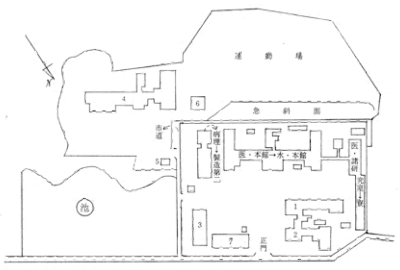
その中でレーモンドホールが整備される過程は湯浅美仁氏（医学部同窓会幹事）が探索し、『忘れられたレーモンド建築』として纏めている。発端は、三重医専が大学昇格を目指す中で、図書の整備が求められたことにある。図書整備を担当したのは三重医専の妹尾左知丸教授で、教授は手を尽くす中で懇意の米軍軍医から医学雑誌の寄贈を受けることができた。書庫を設けることになったがこれを図書館に拡張し、旧制三高時代の友人だった岡本剛氏がレーモンド建築設計事務所所員である縁を辿って、レーモンドへの設計依頼に漕ぎ付けたという。岡本剛氏は京都帝大建築学科を昭和 14 年に卒業し、レーモンド建築設計事務所に昭和 24 年に入所している。日本建築学会賞作品賞の受賞作品であるリーダーズ・ダイジェスト東京支社が最初の構造設計担当作品で、群馬音楽センターなどのレーモンドのRC造の作品で、迫力ある造形を可能にした構造家である。

レーモンドホールの当初設計図の件名は、LIBRARY FOR MIE MEDICAL COLLEDGE で、中には三重医大と件名の入っているものもある。また、施工者の大成建設の建築工事完了報告書では、三重県立医科大学を工事委託者とする 4 件の工事の中に図書館が含まれている。レーモンドホールの設計や整備は三重医県立科大学図書館として進められたことが分かる。引き渡し日は昭和 26 年 9 月 30 日であるが、供用開始時の施設名は不詳である。この小さな図書館は時期によって本館であったり分館であったりと、図書館としての位置付けが変化するが、昭和 44 年の移築直前の施設名は三重県立大学図書館水産分館だった。

当時のレーモンドの作品の大半は住宅や事務所などの民間施設、米軍施設で、地方公共団体の施設はこの後も殆どない。三重県施設の設計は異例で、妹尾教授の人脈以外にはレーモンドを設計者とする理由は不明というほかないが、三重医専の昇格には GHQ 三重軍政部の協力があったことや、レーモンドが米軍に顔が利く存在だったことの影響も想像されなくはない。実際、工事の際も材料調達が容易ではなかったため、一部はレーモンドが米軍に交渉を行ったという。

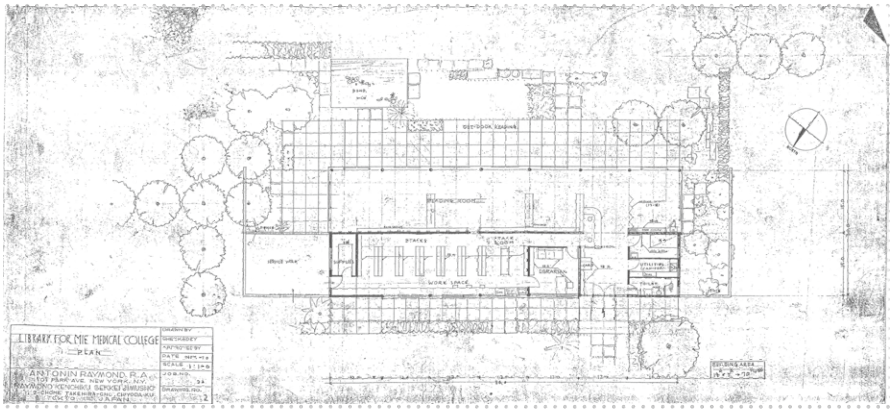
大谷町の敷地は、津駅西口から西に向けて延びる県道に面している。この一帯は昭和 30 年代に住宅地開発が進むが、昭和 20 年代には丘陵地が拡がり、一部に住宅が点在する状態だった。県道に近い平坦地には現在、三重県総合教育センターと駐車場があり、敷地の東側は下部田池で限られている。レーモンドホールが図書館として整備された当時は県道に面する正門の正面奥には本館があり、これに幾つかの校舎が連なって本館前を広場のようにしていた。また、その奥の一段高い現在の三重県立美術館部分の西半部は運動場で、東半部には新設された県立大学水産学部の校舎があった。図書館は池に面する平坦地の東端に位置し、入口は広場に向いていた。ほぼ南北の棟を境に広場側には入口、書庫、便所があり、池の側は閲覧室という単純な平面構成で、

津市大谷町の三重県立大学
（画面中央に図書館、『三重県立大学誌』）



三重県立大学配置図
（図書館は図の 3、『三重大学水産学部誌』）

三重県立美術館入口付近
（奥の道路上に三重県立大学図書館があった。左側は池）



当初平面図（レーモンド設計事務所提供）

竣工写真（池側）（撮影者不詳、三沢浩氏提供）

竣工写真（広場側）（撮影者不詳、三沢浩氏提供）

閲覧室の外側は当初設計図では outdoor reading と書かれている。屋外は閲覧室と一体となった読書休憩のスペースだったのである。

レーモンドホールの当初の状況を示す資料には、設計図に加えて、2 点の竣工写真がある。写真は何と三沢浩氏がお持ちだった。このような写真があろうとは思ってもいなかったので、氏の研究所で見せていただいた時は信じられない思いだった。お借りして設計図や地形図と照合すると、竣工時の写真と考えて良いことが確認できた。氏が『自伝アントニン・レーモンド』の刊行準備中、レーモンドから託されるなどした、手元の写真の中にこれがあった。しかし、写真に裏書もなく建物が特定できなかったため、気に掛かっていたが用いてこなかったとお聞きした。設計図にも竣工写真にも、建物の両側面に板塀が取り付いている。私は板塀の意味が分からなかった。しかし、ここで県立大学の医学生時代を過ごした中山尚夫氏、多気義雄氏に当時のことを伺って合点がいった。校舎で取り囲まれた広場のような部分は、広くはないが準硬式野球部がグラウンドとして使用していた。校舎に球が飛び込んで窓ガラスが割れるのもしばしばだったという。板塀は、開口部の多い建物を球から守るためであったようである。また、このことから図書館の設計は敷地の実情を踏まえて、発注側との意思疎通の上でなされたことも知った。但し、後年、この板塀は撤去されたようで二人の記憶にはない。

中山氏、多気氏の当時は、医学部は別キャンパスに移転しており、大谷町は教養課程と水産学部のキャンパスとなっていた。当初は医学書を収めていた図書館も、教養課程を主対象とする図書館となっていた。両氏によれば、ここは本を読むというよりも、学生たちの溜まり場であった。以下は両氏の証言である。―ほかの建物が暗く、じめじめした感じだったのに、全周がガラスでとても明るく、日当たりがよいので吸い込まれるように入っていってしゃべった。特に寒い時によく集まってだべった。好きな建物だった。有名な外国人建築家が設計したということなど学生たちは知らなかったと思う。当時から伊勢神宮の建築を真似たというううわさが聞こえていた。丸い柱を見てそれを納得することができた。建物の印象は、全然普通と違う、軒が深くて傾斜がゆるい、屋根が瓦ではなく何が材料かわからなかった。薄い屋根を載せた低い建物を見て台風で飛んでしまわないのかと心配した。これらの当時のことはしっかり覚えている。

この小さな図書館は愛される建物だったのである。しかし、これが大谷キャンパスにあったのは、昭和 26 年から 43 年の間で、20 年にも満たない。三重県立大学は国立の三重大学との統合の前提として三重大学隣接地にキャンパスを移転させることになったのである。

当時は、県立大学が国立大学に吸収される例が少なくなかった。各県にとっては大学を維持する財政負担が重荷となっていたのである。移転に際して、大谷キャンパスの校舎は、この小さな建物を除いて全て取り壊された。当時、関係者の間でどのような検討がなされたのかは確認できない。しかし、この建物だけは解体移築され、図書館から食堂に用途を変えて生き続けることになったのである。

菅原 洋一
三重大学名誉教授

INTERVIEW

会員の自主性を尊重し、やりたいことができる会に

そのための中長期的な組織改革に着手

矢田義典 前支部長・水野豊秋 新支部長に聞く

新支部長に愛知地域会の水野豊秋さん（株式会社ヤスウラ設計 代表取締役）が就任されました。会員減少・高齢化・財政難など相変わらずの課題に加え、新型コロナウイルスの影響により活動が停滞している状況ですが、今こそ中長期的な視点に立った実行力のある戦略が必要とされています。そこで、今回は東海支部が持つべき戦略について、矢田義典 前支部長にも参加いただき、おふたりの思いを語っていただきました。

※インタビューは愛知県独自の緊急事態宣言発出前の 3/27（金）支部役員会に先駆けて行いました。

矢田義典さん

水野豊秋さん

中澤――まずは矢田 前支部長、2 年間お疲れ様でした。2 年間を振り返って感じたこと、新支部長に伝えておきたいことについてお聞かせください。

矢田――事務局員交替騒動に始まり、コロナで終わる慌ただしい 2 年間でした。本来の運営とは異なる対応に追われ、なかなか会の本質に迫る動きができませんでしたが、いくつかの支部事業で大きな動きのあった 2 年間でした。特に 1 年目は会報誌「アーキテクト」の改革に取り組みました。これは「アーキテクト」そのものに原因があった訳ではなく、JIA ひいては建築家が抱えた問題点の改革だったと捉えています。法人協力会からの広告収入に頼り、減少傾向にある予算体制、そして何より会員から原稿執筆の協力が得られないという実情を改善すべく会員の意識変革を目標に取り組みました。改革から約 1 年が経過し、一定の成果が得られたと感じています。

その他にも、卒業設計コンクールが今期で取り止めとなりました。これは正に建築家が弱ったことの象徴であると思います。長らく同じメンバーで運営が続き、後に続く新規メンバーがなかなかいないことで、組織が固定化し疲弊してしまった結果だと思います。しかしその後、各大学の先生方や学生から再開を要望するお声掛けをいただきました。このことで、企画者自身、本事業が評価されていたことに気づくことができました。大変喜ばしい要望を受け、再開に向けて改めて準備を進めているところです（残念ながら、コロナウイルス感染拡大を受け、4 月に正式に中止となりました。今後は JIA 会員、大学教員、学生を交え来年の開催に向け新体制で協議を始めていきます）。

また、東海支部が主管を務めたゴールデンキューブ賞が一区切りとなりました。ここでは、東海支部の存在感を他支部に示すことができましたし、改めて東海支部の豊富な人材を再認識することができました。ゴールデンキューブの大きな成果を受け、本部からの依頼で子ども建築会議の設立運営を東海支部主導ですすめる予定です。

さらに、六鹿会長の号令の下、JIA で SDGs を推進する動きも出てきました。愛知主催の支部大会 2019 では、SDGs をテーマにした事業も開催しました。今後、SDGs に関しては「アーキテクト」で特集号を組んでいただくなどして、私も積極的に関わっていきたいと考えています。ところで、SDGs といえばサスティナブル・持続可能がキーワードですが、JIA 自体が危機的状況にあり、全くサスティナブルではないと感じています。持続可能な会の運営を模索しなければいけません。そのために、「アーキテクト」の改革に続いて、2 年目で支部会費徴収に関する議論に踏み込みたかったのですが、そこに至ることができませんでした。支部会費に関する案件は次期に託したいと思います。

中澤――まさに様々な課題に直面した転換点とも言える 2 年間だったと思いますが、前回 2 年前のインタビュー（2018 年 6 月号）では「ローカル」と「グローバル」を軸に活動を進めたいとのことでした。その成果をお聞かせください。

矢田――先ほどお話した様々な課題への対応に追われ、正直、「グローバル」については何もできませんでした。私の知人を介して海外の建築家との交流について提案はしたものの、具体的な検討までは進んでおらず、実施できていない状況です。他支部では、定期的に UIA 所属の海外建築家団体と交流しているところもあるそうですが、海外交流を担っていただける人的余裕があれば、東海支部でも行え

たらよいかなと思います。反対に「ローカル」については、地元行政への働きかけとして、三重地域会の防災協定、愛知地域会の設計者選定支援の働きかけを行う行政 WG の始動など、地域会主体ながらも活動を始めることができました。また、愛知地域会が名古屋市立大学で行っている大学講座は多様な会員構成に支えられ、開始から4年が経過しました。今後も継続される予定ですが、地域で活躍する会員のちからを有効に活用すべく、このような事業が支部全体で行えたら良いと考えます。

さらに「ローカル」で活躍する建築家が「グローバル」スタンダードとして登録建築家の意義を再認識すべきと考えていましたが、支部の運動として活動を起こすことはできませんでした。（当初予定では、今回の支部総会後に資格制度セミナーを行い、運動のスタートを切るはずでした）民間資格だから弱いというわけではないと思いますが、登録建築家をひとつの運動として残すのか、これは、ひいては建築家について考えること、JIA について考えることにつながる重要な話で、今後も議論を続けなければいけないことだと思います。

中澤――ありがとうございます。2年間での様々な変化の後、主に支部会費に関する検討を託したいとの矢田前支部長のご意見ですが、水野新支部長、今期2年間の構想と展望についてお聞かせください。

水野――まずは矢田 前支部長、激動の2年間、大変お疲れさまでした。地域会長を経験される事なく、いきなりの支部長就任にも関わらず、事務局の立て直し、「アーキテクト」の見直しなど、矢田支部長でなければできない大変活動的な支部運営をされた前期2年間だったと思います。その成果を引き継ぎ、私なりの2年間にしたいと考えていますが、私は入会以来、これまでの活動で新たな事業をおこした経験はありません。支部事業としてすでに確立されていた卒コン、支部設計競技の委員長や UIA 大会実行委員会の委員を経験させていただきましたが、どちらかと言えば支部幹事長、愛知地域会長として組織的な側面に重点を置いて活動してきたと思っています。その経験を活かして、支部会費徴収をはじめ、今期の2年間で次世代につなぐ中長期的な組織改編や活動の見直しに取り組みたいと考えています。ただし、支部会費徴収に関しては、検討したから結論が出るという話ではなく、議論の期間として2年間と言うのは短いと感じています。そこで、来期で結論を出すことが出来るようロードマップを作成し、議論検討していきたいと考えています。また、来期は東海で全国大会を開催する予定です。もうひとつの大きな活動の柱として、早々に大会運営委員会を発足し、今年1年で大会の骨子を固め、2年目で具体化、細部の調整を行い、こちらも来期にバトンタッチして大会を成功に導きたいと思います。

中澤――中長期的な組織改編、活動の見直しとのことですが、具体的にはどのように進められる予定でしょうか。

水野――支部会費に関しては当然ながら四地域会全ての同意がなければ実施することができません。私が入会した当時は、地域会それぞれに個性があり、事業や運営に関して地域会同士での議論が絶えず、その間に入って、つなぎ役となっていたのが支部でした。現状、地域会毎に環境も事情も異なるので、新たに各地域会長を支部総務委員に位置づけ、役員会以外でも地域会同士で意見交換を行う事が出来るようにします。また、支部財政に関して、収入と支出（特に固定費の内容や愛知との関係など）の詳細を把握できている会員は意外に少ないと感じています。財政に関して、これまで私がまとめてきた資料の提示を含め、会員へわかりやすく情報共有することが重要だと考えています。最終的には会員も巻き込んだ上で、支部―地域会でよく連携し、一定の成果を出したいと考えています。活動の見直しに関しては、JIA は昔から若い世代が動くことには前向きで、そうすると発展的に成功していく場面が多かったと思います。ただ、ここ最近は矢田前支部長も言及されたように、会員の高齢化、若手不足が続き、事業に携わる会員が定着化・固定化している様に感じます。実際、事業の数も現状で一杯一杯かもしれませんが、三重の防災協定、愛知の設計者選定支援に関する行政 WG などの実務につながるような事業は、会員に会の意義をより感じていただくためにも積極的に推進していきたいと思います。

矢田――支部事業の多くは協賛金を集めることで、事業毎に収支のバランスを取っています。ただ、協賛金確保のための負担が大きく、なかなか委員長の引き継ぎがうまくいかない傾向にあるので、そもそも事業予算を軽減することを検討すべきだと思います。例えば、時にはゲスト審査員含め、東海地方に限定して固定費を圧縮するとか。優秀な支部会員の発掘、登用につなげてもよいかなと思います。

水野――確かに事業予算の圧縮は必要だと考えます。ただ、法人協力会からの協賛金を筆頭に、協賛金の徴収が悪いわけではないと思います。会員が協賛者に対して実利につながる動きができれば、お互いにより良い関係を保つ事が出来るはずです。事業の遂行に、協賛金がいかに重要か、その意識を共有するための情報発信は必要なことだと思うので積極的に行っていきたいと思います。

矢田――さらに支部会費に関しては、まず先に JIA の建築家憲章のような東海支部独自の行動規範というかスタンスをはっきり示すことが必要かもしれません。なんのための会費なのか。足りないから徴収するという会費ありきの姿勢ではなく、支部としてのスタンスに沿って活動するために必要な費用なんです、と表明する。その方が会員の了承を得られるかもしれないし、場合によっては会員外からの協賛が得られるかもしれません。

水野――確かにそうかもしれません。なかなか大変なことではありますが、前向きに検討します。

中澤――お二方から課題に対する様々なご意見をいただきましたが、最後に矢田 前支部長からエールをいただけますでしょうか。

矢田――コロナ騒動により活動制限された今こそ、会を見つめ直す良い時期だと思います。今は何でもできる時代ではないし、支部運営は誰がやっても大変だと思います。全国大会も控えたこの時期に、水野支部長には少し落ち着いて安定的な会の運営を行っていただけると期待しています。

水野――矢田前支部長には、2年間である程度、改革の路線を引いていただけましたし、全国大会という節目がありつつも、とにかく若手が動きやすく、発言しやすい会を目指して活動していきたいと思います。

中澤――財政に関する情報共有に関しては「アーキテクト」誌面で協力させていただくことができると思います。中長期的な改革ということで目立った動きは少ないかもしれませんが、その先に得られる成果を期待して会員一同支部体制を盛り上げていけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。

[聞き手]
中澤 賢一
東海支部会報委員長
堀内建築研究所

2020年度 JIA 東海支部・地域会役員構成 （敬称略）

■東海支部

［相談役］

清水一男（三重）

［顧　問］

小田義彦（愛知）　谷村　茂（愛知）　服部　滋（愛知）

車戸愼夫（岐阜）

［本部理事］

本部理事・支部長	水野豊秋（愛知）
本部理事	奥野美樹（三重）

［幹　事］

副支部長	八木　紀彰（静岡・地域会長）
副支部長	澤村喜久夫（愛知・地域会長）
副支部長	長尾　英樹（岐阜・地域会長）
副支部長	出口　基樹（三重・地域会長）
幹事長	森　哲哉（愛知）
幹　事	石橋　剛（静岡）
幹　事	浅井裕雄（愛知）
幹　事	西村和哉（愛知）
幹　事	関口啓介（愛知）
幹　事	内田実成（岐阜）
幹　事	森本雅史（三重）

［監　査］

鳥居久保（静岡）

石田　壽（愛知）

［委員会・評議会委員長（議長）/ 補佐］

建築家資格制度実務委員会	宮坂英司（愛知）
懲戒審査委員会	石田　壽（愛知）
会報委員会	川本直義（愛知）
建築相談委員会	清水孝昭（愛知）
総務委員会	矢田義典（愛知）
東海設計競技特別委員会	間瀬高歩（愛知）
東海住宅建築賞特別委員会	伊藤恭行（愛知）
子どもの建築学校委員会	鈴木賢一（愛知）
ゴールデンキューブ賞 2019/2020 特別委員会	鈴木賢一（愛知）
災害対策委員会	杉山貞利（静岡）
JIA25 年賞審査委員会	谷村　茂（愛知）
幹事長補佐	鈴木慶智（愛知）

［本部役員（東海支部関係分）］※支部長・本部理事は前記

総務委員会	水野　豊秋（愛知）
広報委員会	出口　基樹（全国広報委員長会議・三重）
職責委員会	小田　義彦（愛知）
財務委員会	鈴木　利明（愛知）
本部職能資格制度委員	野々川光昭（愛知）
本部建築家資格制度実務委員	宮坂　英司（愛知）
CPD 評議会委員	豊田由紀美（三重）
JIA 災害対策会議	杉山　貞利（静岡）
JIA 環境会議	笹野　直之（愛知）
JIA 建築相談会議	清水　孝昭（愛知）
JIA 保存再生会議	中澤　賢一（愛知）
JIA まちづくり会議	黒野有一郎（愛知）
JIA 全国卒業設計コンクール	奥井　康史（愛知）
名誉会員選考委員会	矢田　義典（愛知）

■静岡地域会

地域会長	八木紀彰
副地域会長	大橋康孝
副地域会長	石川正子
運営局長・幹事	石橋　剛
財政局長・幹事	伊久美太助
幹事	高島ゆかり
幹事	江川静男
幹事	秋山　元
監査	村松　篤
監査	尾林孝雄
東部部会代表	鈴木成昌
中部部会代表	三輪　豊
西部部会代表	渡辺　隆
アドバイザー	田中楯夫
アドバイザー	花村芳夫

＜委員長＞

総務委員会兼事務局改変特別委員会	伊久美太助
市民交流委員会	石川正子
ウォッチング委員会	江川静男

建築セミナー委員会	高島ゆかり
建築相談委員会	鳥居久保
災害対策委員会	秋山　元
広報委員会	鈴木俊史
選挙管理委員会	清　峰芳

■愛知地域会

相談役	大塚一三
	栢本良三
	鋤納忠治
	福田一豊
	森　鉦一
	森口雅文
顧　問	石田　壽
	尾関利勝
	小田義彦
	服部　滋
地域会長	澤村喜久夫
副地域会長	浅井裕雄（広報室担当）
副地域会長	関口啓介（事業室担当）
副地域会長	西村和哉
副地域会長	森　哲哉
地域会長補佐	近藤万記子（研修室担当）
地域会長補佐	見寺昭彦（総務室担当）
直前地域会長	吉元　学
監　査	鈴木利明
監　査	谷村　茂
＜室長・委員長・会長＞	
総務室	村上貴彦
総務委員会	間瀬高歩
会員委員会	長谷川憲章
広報室	城戸康近
広報委員会	奥井康史
ブリテン委員会	川本直義
研修室	宮坂英司
研修委員会	東福大輔
職能・資格制度委員会	高木耕一
事業室	上原徹也
事業委員会	黒野有一郎
建築相談委員会	清水孝昭
地区連絡会	黒野有一郎
住宅研究会	西村和哉
保存研究会	中澤賢一
法人協力会	小玉真澄

■岐阜地域会

地域会長	長尾英樹
副地域会長	内田実成
幹事	長尾英樹
幹事（会計）	内田実成
監査	山田貴明
監査	岡田典久

■三重地域会

相談役	清水一男
地域会長	出口基樹
副地域会長	森本雅史
事務局	相原宏康（常任幹事）
会計	西出　章（常任幹事）
監査	松本正博
監査	高橋　徹
＜運営幹事＞	
運営幹事（総務委員会）	奥野美樹
運営幹事（事業委員会）	山本覚康
運営幹事（研修委員会）	久安典之
運営幹事（広報委員会）	池澤邦仁
運営幹事（研究・社会活動委員会）	豊田由紀美
＜委員長＞	
総務委員会	奥野美樹
事業委員会	山本覚康
研修委員会	久安典之
広報委員会	服部昌也
研究・社会活動委員会	豊田由紀美

お気に入りの歴史的環境調査 データ発掘

名古屋市昭和区・「南山（みなみやま）の邸宅」

名古屋市の南東、昭和区に1925年（大正14年）に「南山（みなみやま）耕地整理組合」の手によって宅地造成が行われた丘陵地がある。

この辺りは今でも閑静な名古屋の高級住宅地として知られているが、ここに紹介する邸宅は、名古屋の老舗建築事務所の創立者でもある丹羽英二が若かりし頃の1936年（昭和11年）に設計し、1938年（昭和13年）に竣工した個人宅である。

200坪余の敷地には主屋と離れ家が軒を寄せ合うように建っており、木造二階建の主屋は入母屋桟瓦葺き、離れ家は平家建の切妻桟瓦葺きとなっている。

北側と西側には道路が接しており北西の角に表門、西側の道路に面して裏門（数寄屋門風）があり、敷地全体は東から西へとかなりの傾斜をしている。

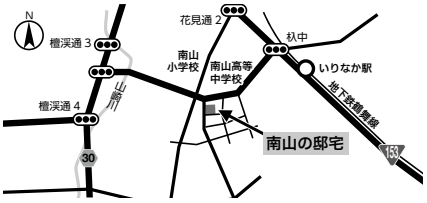
主屋の南側には相当な費用をかけたとみられる庭廻りが今でも当初の形状で現存している。

元々丘陵地であった為に敷地全体が三方を石垣で造成され、接する道路からは2m余の高さを有している。1947年（昭和22年）から米空軍部隊将校の住まいとして契約接収されたとする記録が残っているが、その時、同敷地内に移り住んだ建物が現存する離れ家である。

この邸宅も、昭和初期の典型的和洋折衷住宅の例にもれず、玄関脇に洋室が設えてあるが、こういった経緯の資料も丹羽英二の設計図共々大事に保管されており、2019年（令和元年）に文化庁から国の登録有形文化財の答申を受けた。

答申を受けたものは主屋の他に表門・塀、裏門・塀、石垣等四件で離れ家は含まれていない。戦時中の空襲で焼け野原となった名古屋市内でも、まだまだ昭和初期の住宅（邸宅）が残っているのは非常に嬉しいことであるし、現在の持ち主が維持に非常な努力をされてはいるが、後々残っていくかは一抹の不安がある。

この執筆が「ARCHITECT：保存情報」に掲載される頃には官報告示でも閲覧できると思うので楽しみに待ちたい。



名　　称：南山（みなみやま）の邸宅
所 在 地：愛知県名古屋市昭和区南山
建設年月日：主屋1938年（昭和13年）
　　：後に改修、離れ1947年（昭和22年）
規　　模：敷地面積：約200坪、延べ面積：約70坪

原 眞佐実（JIA 愛知）
原建築設計事務所

編集後記

●今期の支部・地域会役員が掲載されています。会員減少・高齢化の流れにあって世代交替は難しく、今後は世代循環による組織編成が続くと思われます。会報委員会は2期4年間、私が委員長を務めさせていただきました。委員会発足から30年、委員長を2期続けたのは私が初めてで、それも先の要因によるところが大きかったといえます。主に1期目は30周年記念号、2期目は本誌の改革を担当しましたが、4年間腰を落ち着けて編集に向き合うことで、これまでの私の活動姿勢では触れ合えなかった多くの方々の知見を得ることができ、大変貴重な得難い体験をさせていただきました。役員・委員会の皆様、執筆にご協力いただいた会員の皆様、そして読者の皆様、ありがとうございました。今期は川本直義さんに委員長（編集責任者）を務めていただきます。引き続き私も編集に携わらせていただきますので、今後もご協力のほどお願いいたします。（中澤賢一）

●私はずっとARCHITECTの編集に関わっていますが、ここ数年でページ数の削減、編集会社の変更など大きな変化があり、試行錯誤の状態が続きました。最近ようやく安定感を取り戻したところでしたが、コロナウイルスの影響で3月から編集会議が開けない状態となりました。しかし幸いなことに、中澤委員長になってから、数か月先まで掲載内容の検討を行っていたため、こうして無事会報誌が発行できました。多くの催しが中止になり、報告記事も少なくなっている状況で、レーモンドホール物語の連載や保存情報など、安定的に原稿を提供していただけるのは大変ありがたいことだと実感しました。さて、このほど私が編集責任者となりました。前委員長のやり方を踏襲し安定的な発行を続け、会員相互の交流を促すための会報誌にしていきたいと思いますので、どうか皆様のご協力をお願いします。（川本直義）

ARCHITECT
第381号
発 行 日　2020.6.1（毎月1回発行）
定　　価　380円（税込み）
発行責任者　水野豊秋
編集責任者　川本直義
編　　集　東海支部会報委員会
　　愛知地域会ブリテン委員会
　　（有）イヅミ印刷所内
　　ARCHITECT 編集部
　　岡崎市明大寺町荒井10番地
　　TEL（0564）21-2657　FAX 26-1792
発 行 所　（公社）日本建築家協会東海支部
　　名古屋市中区栄4-3-26　昭和ビル
　　TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
　　E-Mail：shibu@jia-tokai.org
　　http：//www.jia-tokai.org/

2019年度「JIAの建築賞」受賞された東海支部の皆さん（五十音順）

JIA 優秀建築選（100 選）

大池薬局ビル

街のハブとして。

浅井 裕雄 ｜ 裕建築計画

ここには以前、大池薬局があり、ビルオーナーの家業です。中区千代田周辺は小さな企業や飲食店、古本屋などがあり、少し古い下町です。このビルは暮らす、働く、商う、が立体的な関係性をもって、街のハブになるような場所として計画しました。そのためにこのビルに住む人たちのコミュニケーション装置として北と南にスキップする関係とＶ字に切り開く複雑な階段と中庭が緩やかに住人を繋ぎます。建築は使う人が重要です。地域に目をむけて使ってくれる人を入居するお手伝いもさせていただきました。Café やオフィース、住みながら働くひとが、この街の盛り上げてくれます。

北から見る　観音像の背景となる屏風のような屋根

JIA 優秀建築選（100 選）

泉柳寺納骨礼拝堂

浅井 裕雄 ｜ 裕建築計画

リフレクトする光が内部を照らす

泉柳寺は東海市にある曹洞宗の寺で、古くから地域の人々によって支えられてきた。納骨礼拝堂の前には古くからある観音像があり、手を合わせる人にとって、背景となるような建築にするために、素朴なデザインを求めた。金属の柿葺きのようなものを作りたくて、地元の板金職人とモックアップを作り、シンプルに一つの折り目を付け、重ね貼りとしている。素材はアルミとガルバリウム鋼板。色むらがバラツキを生んで境内に溶け込んでいる。また、急勾配の屋根は雨切れを良くし耐久性を上げている。宗教は転換期を迎えていることを檀家も住職も意識している。背景のような宗教建築が受け入れられることは、それを物語っている。

JIA 優秀建築選（100 選）

しずぎん本部タワー

塩田 哲也 ｜ 日建設計

このたびは、JIA 優秀建築選にご選定いただきありがとうございます。
本計画は緑豊かで美しい都市景観の創出を目指し、敷地内は地域固有の植生を踏まえた植樹と、既存樹木の保全を行ないました。それにより生まれた「森」は潤いあるオフィス環境のために活かし、また地域の住人が立ち寄れるスペースとしても活かされるように計画しました。建物の外観は本部施設全体の顔、および地域のランドマークとして、街の中心である駅前広場に対して正面性を持たせています。また既存の研修センターと素材や形状に共通性を持たせるなど、森の中に佇む一体感のある意匠としました。

撮影：鈴木文人　鈴木文人写真事務所

JIA 優秀建築選（100 選）

岡崎信用金庫城下町支店

塩田 哲也 ｜ 日建設計

このたびは、JIA 優秀建築選にご選定いただきありがとうございます。
「四方八方への情報の発信と集積」「街をやさしく灯す行燈」をコンセプトに計画しました。金融店舗は多くが街の要所に立地しますが、そのような場所で期待される役割、つまり街並みの連続やにぎわいの観点からは、その閉鎖的な特性により歓迎されていないのが現状です。この計画では、周囲に向けて裏をつくらない正八角形の平面計画、全方位開口、地場産の木材を活かした外観づくりを行いました。それにより街の賑わいづくりを通して公共貢献を行う金融店舗の実現を試みました。

撮影：鈴木文人　鈴木文人写真事務所